

令和6年度 第2回 三島市青少年問題協議会 会議録

- 1 開催日時 令和7年2月4日(火) 午後2時～午後3時45分
- 2 開催場所 三島市民生涯学習センター3階 講義室
- 3 出席者
 - (1) 会長 豊岡武士三島市長
 - (2) 委員 森正晴三島警察署長代理古川智之三島警察署生活安全課少年係長、竹林重行三島市教育委員、永倉えり子三島市社会教育委員長、松下明子静岡県立三島北高等学校校長、鈴木久美子静岡県立三島南高等学校校長、石垣智博静岡県立三島長陵高等学校校長、石井芽久美三島市自治会連合会副会長、長谷川光宏三島地区保護司会副会長、長島信行三島市民生委員児童委員協議会理事、寺野下昌秀三島市PTA連絡協議会会長、渡邊美恵子三島市交通安全保護者の会連合会会長、茨木太郎三島市子ども会連合会会長、大川鈴代三島市中央女性学級運営委員、横川久美子いきいき友の会副会長、上條猛ボーイスカウト伊豆地区地区委員長、宍倉睦美ガールスカウト三島地区連絡協議会会長、服部光弥三島市青少年健全育成会監事、足立博道三島市スポーツ少年団本部長、小塚英幸三島市教育長、佐野文示三島市こども・健幸まちづくり部長、西川達也三島市社会福祉部長、鈴木隆幸三島市教育推進部長
 - (3) 事務局 沼上勝一生涯学習課長、稲木修二女性青少年係長、渡辺美保子主任、上田康博指導主事、山中彩愛主事補
- 4 会議の公開・非公開の別 公開
- 5 傍聴人の人数 0人
- 6 会長あいさつ
会長である三島市長からあいさつが行われた。
- 7 研修「絵本から考える二次障害の防止と共生社会」
講師： 絵本作家 竹山 美奈子氏
(以下、研修事項のため、割愛。)
続いて、4班に分かれて、自己肯定感を高め、二次障害を防ぐ「肯定的な声かけ」について話し合いが行われた。テーマは①「早くして！」の言い換えは？ ②イライラして壁を殴った小学生、③「学校に行きたくない」と言う中学生、④時間までに仕事が終わらない社員に向けた声かけについてである。主な内容は次のとおり

委員

③については、最初の言葉は「わかる!」。一定期間を終えてからどうしていこうか等、休むなら何しようみたいなどころにつないでいけばいいと思う。④については、「どこが不安なのか一緒に考えてみよう。」と寄り添っていく。

委員

①については、ゲーム感覚で「お支度競争をしてみよう」というような違った発想で対応するという意見があった。②については、手を心配しながらも「もっと殴ったっていいんだよ。」というような逆転の声かけの意見も出た。③については、「ゆっくりしていいよ。何か嫌なことがあった?」と聞いてみる。④については、「私達に手伝うことはできますか?」という声かけを試みる。

委員

③については「今何をしたいの?どうなれば楽しくなる?」と子供が求めていることを聞く。④については、「あとどれくらいあれば終わる?手伝ってほしいところがありますか?どこかわからないところがありますか?あなたが一生懸命なのはわかるから大丈夫。焦らずにやりましょう。」と声かけをする。

委員

①については、「丁寧だね。ゆっくりやって。」と声かけする。②については「手が痛かったね。」「壁も可哀そうだね。」「壁を殴るなら軽く殴ろうよ。」③については、「行きたくなったら行こうね。」「のんびりしてみたらいいよ。」「困ったことはあるの?」というような声かけが必要という意見があった。④については、「帰るぞ。」「ここまでできているんですね。」という声かけをする。

講師

皆さんの回答は本当に優しく、正解、不正解はない。「丁寧だね」等寄り添う姿勢やお母さんと競争する等ゲーム感覚にし、能動的に早くしようという気持ちに切り替わるような声かけが見られてよかった。皆さんが素晴らしいコメントだったので、共有したい。事実を伝えて本人と気持ちを揃えていくことが共感の第一歩。論ずようなつもりで、まず感情に寄り添って共感することが素晴らしい。寄り添った言葉かけをすると本人が納得して、対策を自分から考えられるようになる。共感と安心感の積み重ねにより、自己肯定感、自分が誰かの役に立てる人だという気持ちが育つと言われている。

市長

障がいのあるなしに関わらず、発達特性も含めて各々の特性を理解し、一人一人が違うことは当たり前であることと認識し、特に発達特性のある人には肯定的な声かけをすることが二次障害を防ぎ、誰もが生きやすい共生社会をつくっていくことに繋がると改めて感じたところである。

教育長

三島市には小学校が14校、中学校が7校あり、そのうち小学校には6校に特別支援学級を設置している。今年特別支援学級の子どもは約150人で、1クラス定員8

人で、24クラスある。中学校は4校に約56人おり、11クラスある。5年前は小学校には4校にしか特別支援学級がなく、中学校には2校しかなかったので、現在増えている。学校内で交流しあって共生教育ができています。来年度もおそらく小学校では3クラスくらい増えるのではないかと状況である。本日勉強したような「皆違って皆いい」という教育を三島市も進めてまいりたい。

市長

三島市は日本一幸せに暮らせる都市を目指して「ウェルビーイングなまちづくり」を推進しているが、誰もが自己肯定感を持って、幸せを感じて過ごしていける社会を目指すことはこのウェルビーイングにも繋がるものと考えている。今回いただいた講話の内容をもとに、皆様の所属団体の取り組みの参考にしていただけたら大変幸いです。全ての子ども・若者が心身ともに健やかに生き生きと生活できるよう、皆様にご協力をお願いしたい。

8 閉会